

H ostelling Magazine

2/15
Spring
2016

いかに何も知らないかを
思い知らされることも、「旅」。

作家 沢木 耕太郎 氏

Hostelling Magazine × 地球の歩き方 www.arukata.co.jp

おいしいだけじゃない!

ノスタルジックな台湾を発見

- 台湾 台北/猴硐/十分/九份/基隆
- 台北&近郊の町を巡る2泊3日モデルコース
- おいしい! かわいい! 台湾の魅力

Youth Hostel Pick up

人と自然が温かく歓迎する 北の隠れ家

東大雪ぬかびらユースホステル

🌀🌀トリップアドバイザー®

- ユースホステル口コミ情報局
- これって誰得!?
- なぜかそそられる日本の“端”ランキング

Event Information

- 2016 SPRING
全国のイベント情報満載

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





www.yamazakipan.co.jp

LUNCH PACK
A GO! GO!



ランチパック

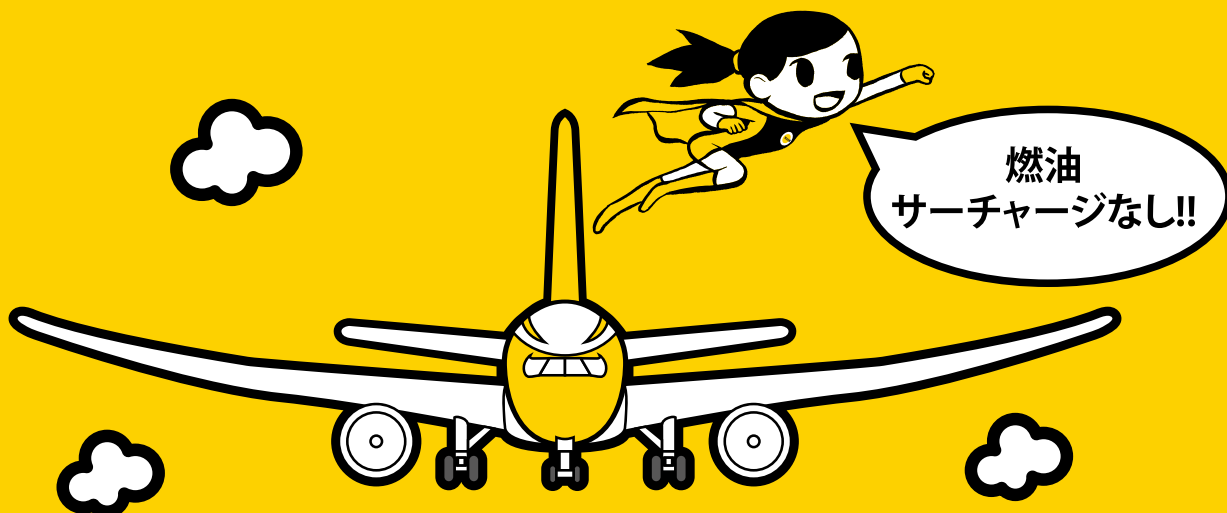




FLYSCOOT.COM



うわさの787もう乗った?



最新のB787に乗るなら
LCCのスクートがおトクっス

東京 ✈️ 台北

大阪 ✈️ 高雄

片道 **2,500円**~!

※空港諸税別途必要です

航空券のご予約は弊社HPまたは旅行代理店にて

お問い合わせ スクートコールセンター
TEL 03-4579-5788 受付時間 7:00~21:00

FLYSCOOT.COM

スクート

検索



@InsideScootJP



flyscoot

※店舗によって取扱のない営業所もございますので、お近くの旅行代理店に直接お尋ねください。



HOSTELLING
INTERNATIONAL

Vision

Principle and Philosophy

Inclusivity

世界を超えて

Learning and Understanding

考えよう

Sustainability

僕らと子ども達の未来のことを

日本ユースホステル協会はユースホステルのビジョンに基づき、日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

Line up

インタビュー..... P02

作家 沢木耕太郎 氏
いかに何も知らないかを思い知らされることも、「旅」。

Youth Hostel Pick up..... P10

人と自然が温かく歓迎する北の隠れ家
東大雪ぬかびらユースホステル

Hostelling Magazine × 地球の歩き方..... P14

おいしいだけじゃない！
ノスタルジックな台湾を発見
台北／猴硐／十分／九份／基隆
■台北&近郊の町を巡る 2泊3日モデルコース
■おいしい!かわいい!台湾の魅力

トリップアドバイザー..... P20

■ユースホステル口コミ情報局
■これって誰得!?なぜかそそられる日本の“端”ランキング

Event Information..... P22

※本紙の情報は2016年2月1日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。
発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会
編集・発行人 水野 幸
TEL (03) 5738-0546
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。
制作・印刷製本/サンメッセ株式会社

Hostelling Magazine

Interview vol.004

沢木耕太郎

1970年代の初め。

一人の青年がバックパックを背負って日本を旅立ち、
路線バスによるユーラシア大陸横断を敢行する。
当時、まだ駆け出しのノンフィクション・ライターであった
その26歳の青年こそ、後に「旅の巨匠」と評される
沢木耕太郎その人であり、その旅の記録こそが、
“バックパッカーの聖書(バイブル)”として、今も多くの人々を魅了し、
旅へと駆け立て続ける、紀行文学の金字塔『深夜特急』に他ならない。

…今回のインタビューは、
ノンフィクションを独自の視点から文学にまで高めた、
作家・沢木耕太郎氏をお迎えし、旅の魅力、名作『深夜特急』の舞台裏や、
若者と旅にまつわる思いなどをたっぷりとお聴きしました。



高校一年生のひとり旅が、
その後の旅に「決定的な影響」を与えた。

沢木さんの旅の「原点」について
お話をいただけますか？

「原点」というなら、もしかしたら母親のお腹の中にいたころから、何か旅好きになるきっかけが始まっていたのかもしれませんが。僕にとって、決定的な影響を与えてくれたのは、高校1年生の春、16歳の春休みに敢行した東北一周ひとり旅でした。当時は、JRもまだ民営化前の国鉄で、「均一周遊券」という割安チケットがあったのです。確か、1枚2千円くらいだったかな。東北なら東北のエリア内で、急行にも夜行列車にも乗り放題。つまり、宿を取らなくても、夜行列車や待合室のベンチで眠れるから、貧乏旅行にはピッタリだったんです。その旅を通じて当時の僕は、実に多くの東北の人たちから、親切にされた。雪深い津軽を歩いていればトラックに乗せてくれたり、電車の中では食べ物をもったり、見知らぬ人に食事をご馳走になったり…。本当に多くの「心動かされる経験」をしたんです。それ以来、アルバイトをしてお金を貯めては、旅行をするようになった。だから僕は未だに、“旅先においては性善説”を唱えているんです(笑)。

学生の頃からひとり旅をされていたということは、
ユースホステルにもなじみが深いのでは？

学生時代に国内を旅していた時も、あちこちで利用させてもらいました。本当に、ユースホステルがあったおかげで日本全国を旅できた。若い頃のお金がない旅行は、お金がないから素敵なんですよ。ユースホステルには、当然のように旅を共にする人たちがいるわけですが、他人の話を聞くのが好きな僕は、そこで出会った人たちの話に耳を傾けながら、「世の中には実にいろんな人がいるんだなあ」と感心した記憶があります。実は『深夜特急』のゴールであるロンドンに着いた後、僕はユースホステルに泊まってるんです。ロンドンにゴールした時にはお金がほとんどなくなっていて。アムステルダムからドイツを周っている時に初めてユースホステルカードを使っただけです。たしかマンハイムというドイツの古都でしたが、小さな市街にトラムに乗って行って、いいユースホステルでしたね。羽根布団を小さくしたような、あのドイツ特有のベッドがあって、とても印象に残っています。



様々な機会に

沢木さんはひとり旅を勧めてらっしゃいますね。

それはね、こういうことなんです。昔、仲の良い友達とスペインを一カ月、クルマで周ったことがあって。勿論、楽しくなかったわけではないんです。でもね、今振り返ってみても「楽しかった」の一言で終わっちゃうんです。もし一人で同じ場所を同じ期間、旅していたら、膨大な記憶と言葉が残っていると思うんです。常に自問自答しているわけですからね。そうして、旅が、風景や情景が、深くなる。人々の親切が身にしみわたってくる。日常生活の中では、未知の人々に混じり、未知の環境にもまれて、という機会は余りないでしょう。「感受する力」を養っていく理想的な環境を、旅は用意してくれる。そのためには、やっぱりひとり旅をすべきなんじゃないかと僕は思うわけです。

ただ、今思えば、行く先も定かでない、あの東北の旅に出た際、父親や母親はよく何も言わずに許してくれたなあ、と思いますね。あのさりげない送り出し方を、自分は親の立場でできるだろうか(笑)。「可愛い子には旅をさせろ」という諺(ことわざ)には、なかなか奥深いものがありますね。

今日は沢木さんにお会いできると聞きつけ、ユース hostel 協会の学生インターンも同行しています。今の若者に何かメッセージをいただけますか？

あくまで原則からお話しますとね、僕は若い人について語ることはしない——というのが持論なんです。“最近の若い者は…”という言い方は、いつの時代も繰り返されてきた口上ですが、そこから展開される論理にはあまり意味がないと思うから。でもあえてお話しするならば、現代の若者が外に出ていけなくなっている現実、やはり否定しようがないわけです。擬似現実的な、バーチャルな情報が身近にいっぱいあって、スマホやパソコンの普及で、簡単に出かけたり、体験したりした気になってしまふ。その圧倒的な現実については、誰も認めざるを得ないでしょう。その意味で、言い方は妥当か分かりませんが、「不運」であるし、「可哀想」だとも思います。

たとえば、インターネットや旅行雑誌の情報なんてない頃の海外旅行は、若者にとってまさしく驚きの連続なわけです。食べるところ寝るところひとつ探すのも簡単にはいかないし、驚きと発見に満ちあふれている。仮にランチにサラダを食べたとして、ただオリーブオイルとワインビネガーを和えただけのドレッシングが、こんなにも美味しいとは!と驚く。一つひとつの経験が驚きの連続だったんです。その意味で、現代の若者は、驚きを感じられなくなっている。その部分で言えば、確かに不運だと思いますが、それでも、その部分を差し引いたとしても、その現場に行けば得られる感動は絶対に在るのです。

『深夜特急』 (新潮文庫 全6巻)



定価497円



定価497円



定価497円



定価497円



定価529円



定価529円

第一便 黄金宮殿 (新潮文庫 1~2巻)

インドのデリーからイギリスのロンドンまで、乗合いバスで行く——。ある日そう思い立った26歳の(私)は、仕事をすべて投げ出して旅に出た。香港・マカオ・マレーシア・シンガポール編。

第二便 ペルシヤの風 (新潮文庫 3~4巻)

偶然に身をゆだねながら、ようやくインドに辿り着いた(私)。自分の中の何かから、一つ、また一つと自由になっていき、旅に快感のようなものを覚え始める。インド・ネパール・シルクロード編。

第三便 飛光よ、飛光よ (新潮文庫 5~6巻)

いつどのように旅を終えようか——ポルトガルの果ての岬・サグレスで、(私)はついに“旅の終わり”を意識する。Being on the road——旅を愛する全ての人に贈る旅のバイブル、ここに完結!

『旅する力』 (新潮文庫 定価637円)

旅とは何か、なぜ人は旅へと駆り立てられるのか? 『深夜特急』の誕生前後、若き著者には秘められた物語の数々があった。幾多の読者からの絶えざる問いかけに初めて、そして誠実に応えた《旅》論の集大成。「恐れずに、しかし、気をつけて」これから旅立つすべての人に——。



ひとり旅が
旅を、情景を、深くする。
自問自答の連続の中で、
言葉が残ってゆく。

沢木さんにも、
「行ってみたかったけれど、行けなかった」
というような場所はあるのでしょうか？

一度、行ってみたかったと思うのは、ベトナム戦争当時のサイゴンですね。1974年、ベトナム戦争まただ中のサイゴンに行く、といった考えは当時の僕にはなかったんですが、今にして思えば行っておくべきだったと、強く後悔の念に駆られます。あの、時代の大きなうねり、世界の混沌を実際に体験してみたかったと痛切に思います。

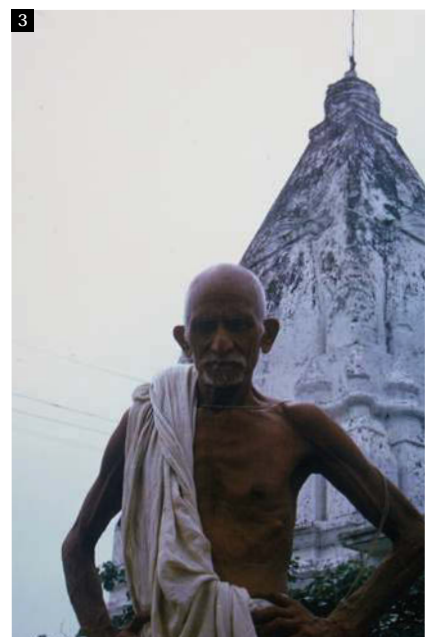
それと、時間を巻き戻して行けるなら、戦前（第二次世界大戦）の上海。1930～1935年当時の上海ですね。そこにある、退廃した美しさとも呼ぶべき空気の中に、我が身を置いてみたかったと、強く思いますね。

例えば、旅に誘われてしまう人・
旅をあまり好まない人というのは、
タイプとして分かれるのでしょうか？

それは間違いなく、あると思います。私のとても親しくしている友人の中にも、全く旅を好まない者がいます。旅をするということは、日常から切り離されて、未知の文化や習慣に常に晒されることです。それを心地よく思わない人も、必ずいるのです。未知の物事に心煩わされたくない、変化を求めたくない、という欲求は、ある意味生物として自然な反応です。たまたま、私の場合は、生まれついて旅が好きだった。知らない相手の話を聞くことも、嫌いではなかった。新しい刺激を興味深く受け止める者もいれば、拒絶反応を示す者もいる。体質のようなものです。逆に言えば、自分の中にまだ見ぬ土地や人々に心動かされる何かを、もしあなたが感じるならば、ぜひひとり旅に出てほしい。その土地に流れる風を感じ、そこに住む人々に接し、その街の物を食べて、何かを感じ取ってほしいと願います。旅には、目的地に着くことよりも感動的な事が、たくさんあるのでから。



1 旅行中の沢木氏が撮影された写真は、『深夜特急』の旅に限らず、極めて少ない。この1枚は、その旅でたった2枚撮られたポートレートの内の、貴重な1枚。背景にはアフガニスタンの荒野が広がる。「旅に物語が多いときは写真が少なくなる」とは沢木氏の弁。
2 今も根強く残るインドのカースト制で、低カースト層とされる子どもたちとおじいさん。この子どもたちの眼差しから世界を見直すこともまた、沢木氏の言う『旅』なのかもしれない。



柔らかな心、感受する力があれば、
予期せぬハプニングさえも
楽しむことができる。

沢木さんの紀行文を読んでいると、
面白い出来事が沢木さんを選んでやってくるような、
そんな不思議な印象を持ちます。

それは、確かにそうなんです。作家の吉行淳之介さんとお話していても感じたのですが、あの方はほとんど旅行されない方で、それでもごくたまにヨーロッパやアメリカに旅すると、途端に面白いことにぶつかる。やはり、同じように旅をしても、面白いことにぶつかる人とぶつからない人がいる。ただ、それにはね、こういう見方もあると思うのです。同じ出来事に遭遇しても、それを感受できる心を持っているかどうか、という視点です。

仮に、エベレストの頂上に立ったとしても、その事実は文章にすれば、わずか1行で終わってしまう。「私はエベレストの頂上を征服した」という具合に。逆に、もし頂上寸前で徹退を余儀なくされても、それを感受する心があれば、高度7,300mでの徹退記の方が、ずっと豊かなものになることもあるでしょう。

だから、常にフラットで柔らかな心を持っていれば、旅の面白さをより深く味わうことができる。イレギュラーなことさえも楽しめてしまうと思います。僕自身も、行く先々で予期せぬハプニングが起きて、ピンチを乗り越え、逆境から立ち直っていくことを、楽しむことができました。

いつ何時、面白いことが向こうからやってきても、それを感受できる心を持つことが重要なのでは、と思うのです。

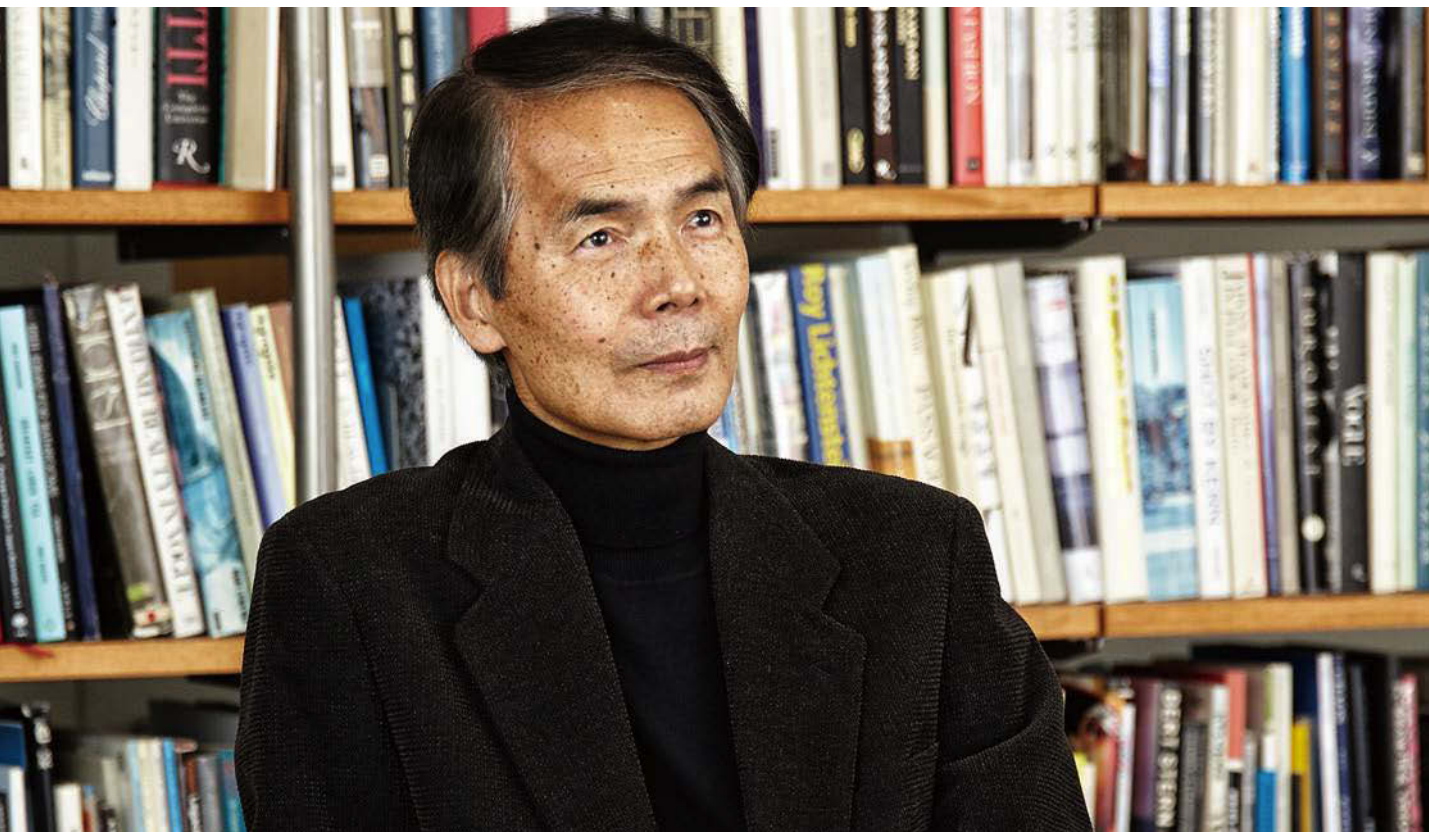
これまでに行かれた国や地域の中で、
お仕事以外で、好んで出かける場所
というのがありますか？

ハワイのアpartメントを借りて、よく一カ月ぐらい滞在して過ごしていました。丘の上にハワイ大学のそれはそれは大きく立派な図書館があって、午前中からそこで好きな本を読んだりして過ごす。昼になれば、併設の日本食風レストランなどでゆったりとランチを取る。午後はビーチで泳いだりアラワイ運河沿いをジョギングしたり、アラモアナショッピングセンターで買い物をして。潮風に当たりながら部屋に帰ったら、クッキングをして、夕日を眺めながらビールを楽しむ。

素敵でしょう、そういう夢のようなバカンス。以前はお気に入りの場所って聞かれると、そんな話をしていたものです。けれどもそれが、なぜか楽しくなくなってきたんです。最近で、久しぶりに一緒に行ってた女房に「ハワイ、あまり楽しくないね」って言ったら、「それはね、ハワイが変わったんじゃないかって、昔は若かったから楽しかったのよ」って答えが返ってきて、腑に落ちたんです。ああ、あの楽しさは自分が若かったから感じられたものだったんだな、って。

やっぱり、旅は若い時の方が楽しいんです。どんな旅でも絶対に、何倍も。僕は「旅の適齢期」って呼んでますが、偶然起きることに対して柔軟に対処できる力が、若さにはあるのです。柔らかな心で反応する能力が、“旅をする力”なんだろうと思います。

いかに何も知らないかを
思い知らされることも、「旅」。



沢木さんは、旅の定義として、大槻文彦の辞典
「大言海」の語釈を引いてらっしゃいましたが。

ああ、<家ヲ出デテ、遠キニ行キ、途中ニアルコト>ね。よく、「沢木さんにとって旅とは？」と訊かれますが、どうにも答えようがないんです。「旅とは何か」なんて。人それぞれに異なる旅があって、旅って、つまるところ自分が作るものだから。ほら、旅番組とか紀行ドキュメンタリーのテーマ音楽が流れたとき、何か心が締めつけられるような、「どこか行きたい」と思うような感情が湧き上がることってあるでしょう。そういう、身体のどこかが刺激されるようなことが旅の始まりだと、僕は思うのです。

旅を重ねれば重ねるほど、自分が分かっていたつもりだったことが、どんどん分からなくなっていく。自分の浅はかなところをこれでもか、と思い知らされるような経験をさせられる。そうした意味合いでは、『深夜特急』の旅にも深く関係してくる言葉ですが、“自分はいかに何も知らないのかを、思い知らされることが、旅。”という言い方もできますね。

Profile

沢木 耕太郎

1947年東京生まれ。横浜国立大学卒業後、ルポルタージュ・ライターとして活動。デビュー作『防人のブルース』ははじめ、1979年『テロルの決算』で大宅壮一ノンフィクション賞、82年『一瞬の夏』で新田次郎文学賞など、ノンフィクションを独自のアプローチで文学にまで昇華。自ら“私フィクション”と呼ぶスタイルを構築し、ノンフィクション文学の第一人者と目される。とりわけ、86年に刊行された『深夜特急』は、バックパッカーのバイブルとして、発表後四半世紀を経てなお、強い支持を受け続けるロングセラーとなっている。

『深夜特急』の第一便が発行されてから
30余年を経過してもなお、
影響を受けて旅立つ若者が後を絶ちません。
若者を行動に誘うチカラの源は
どこにあるとお考えでしょうか？

ある女性の編集担当からも、うらめしげに言われたことが
ありました。「先生の本を読んで、彼氏が旅に出ちゃいま
した」って(笑)。

『深夜特急』には、おっしゃる通り、読者を旅にかきたてる
ような何かがあるのかもしれないね。それはやはり、
『深夜特急』の旅が、「心を震わすことができる旅」だから
なのだと思います。

水のような文章であるにもかかわらず、あの言葉の旋律
というか調べには、確かに人を震わせたり、駆り立てたり
する何かがあります。それは先ほども述べたように、ひとり
旅の中でしか描けない自省や考察、自分自身をもうひと
りの自分が俯瞰するようなもの見方が、旅と旅の経験
を深めていったからだだと思います。そういう、どこか読
む人の心を震わすことができる作品を書けたことが、僕
自身にとっても、すごく幸せなことだと感じています。

どんなに世の中が情報でいっぱいになっても、
知らない土地を旅することには、
大なり小なりリスクがつきまといます。
これから旅を考えている若者に沢木さんから
アドバイスをするとしたら？

そうですね。やはり、『深夜特急』の締めになんて重なってしまいま
すが、『恐れずに。しかし、気をつけて。』という言葉をかける
かな。あまり臆病になりすぎてもいけないし、危険を察する
こともおろそかにしてはならない。そのどっちが欠けてもい
けないんです。リスクと面白いことは紙一重だったりもしま
すし、自分なら、ここまでは突っ込んでいっても挽回できる
な、と思えるところまではギリギリ突っ込んでいく。そのうち
に、痛い目も見たりして、「境界」が分かってくる。そうして少
しずつ、その「境界」が拡大してゆく。

身の丈に合った旅、というのは、境界の見極めができてき
て、初めて手に入れられる感覚でもあります。つまり、どん
どん経験から学ぶ中で、“身の丈”も少しずつ大きくなってい
く。その結果、突っ込んでいけるゾーンも深くなっていく。

そんな濃密な経験の中で養われた感覚は、もちろん日常で
も非常に役立つものです。「未経験」を財産にできるのが、
若さの特権。勇気を持って、かつ慎重に。二度と経験するこ
とのできない旅、僕の表現で言うとするなら、“取り返しのつ
かない旅”へと、ぜひあなたも踏み出してみてください。



青春旅行文学の金字塔

『深夜特急』全6巻

抽選で3名様にプレゼント!

ご応募は日本ユースホステル協会
ホームページの専用お申込みフォームから!

<http://www.jyh.or.jp/hm/>

■応募締切 2016年4月末日

※なお、当選発表は、商品の発送を以て替えさせていただきます。

